

Robert Wuthnow,
Boundless Faith: The Global Outreach of American Churches
University of California Press, 2009. pp. xi + 345, \$39.95

黒田 純一郎

近年、コミュニケーション技術や情報テクノロジー、輸送手段の目覚ましい発達を一因として、個人や集団の相互依存性が世界規模で増大している。しばしばグローバル化と呼ばれるこの過程は、ほぼすべての国に影響を及ぼしており、マクロな経済システムや社会システムだけでなく個人の日常生活も一変させ始めている。

グローバル化の概念は、昨今政治やメディアにおける論争で幅広く用いられており、宗教研究においても重要な概念となりつつある。アメリカの宗教社会学者Robert Wuthnowは、本書でグローバル化がアメリカのキリスト教に及ぼす影響を豊富な質的、量的データによって明らかにし、グローバルな時代におけるキリスト教の役割を分析している。

本書の構成は以下の通りである。

Preface

Introduction

1. At Home and Abroad
2. The Global Christianity Paradigm
3. Four Faces of Globalization
4. The Evolution of Transnational Ties
5. The Global Role of Congregations
6. Faith and Foreign Policy
7. The Challenges Ahead

序章では本書の中心的な主張が述べられ、現在のアメリカのキリスト教を取り巻いている状況の見取り図が描かれている。著者の中心的な主張は、現代のアメリカのキリスト教がグローバル化に影響され始めており、世界の中でますます重要な役割を演じているということである。著者は、キリスト教のグローバル化を推進する要因として国際的コミュニケーションの発達、海外で活動するキリスト教団体の増加、アメリカのキリスト教徒の財産的優位、メガチャーチ、教会の成長の飽和状態を挙げ、これらによってアメリカのローカルな特徴が脅かされ教会はローカルな活動とグローバルな活動のあいだでバランスをとる必要に迫られていると述べる。

第1章では、従来アメリカのキリスト教はローカル性を重視してきたと考えられてきたことが確認される。しかし、著者によれば、今日、合衆国のキリスト教徒による国外での宣教活動や救援活動への支援、医療チームの海外派遣、合衆国の海外政策への関心の度合いは、増加傾向にある。したがって、現代におけるアメリカのキリスト教はローカルな活動のみを重視しているわけではなく、グローバルな活動もまた重視していると考えられる必要がある、と論じられる。

著者は、グローバル化しつつあるアメリカのキリスト教徒たちの活動を「国家を超えた(transnational)」活動として捉えることには限界があると述べる。なぜならば、「国家を超えた」という語には2つの意味が含意されており、彼らの活動にみられる多様性を捉え損なってしまう恐れがあるからだ。第1に、「国家を超えた」活動は巨大な経済的存在を前提としており、教会の小規模な活動や、実際には他国で行われているわけではないがグローバルな態度や信念の現れとして考え得る活動を無視してしまう。第2に、「国家を超えた」人々は、移民を研究する学者によって、特に2国間を頻繁に移動しているバイカルチャーな人々という意味に使われている。この場合、アメリカ国内のみに居住しながらグローバルな活動に従事している人々の存在を適切に捉えきることができない、とする。

著者は、アメリカのキリスト教徒の活動を、商業、政治、文化に関わる多様な活動と考えており、「国家を超えた」に代わって「文化を超えた(transcultural)」という用語を用いるほうがよいと考えている。「文化を超えた」状態は、「合衆国外の活動に従事している、あるいは関心を持っており、他国の人々に影響を与える国際貿易や軍事干渉などの問題に対して意見を持っている」(p. 30)状態と定義されている。「文化を超えた」教会はローカルな活動とグローバルな活動のバランスを維持するよう迫られており、研究者は「国家を超えた」という用語では捉えきれない、これまで相対的に軽視されてきた教会のグローバルな側面にも注目する必要があると論じられる。

第2章では、アメリカのキリスト教の世界的な影響力を過小評価する原因となっているキリスト教とグローバル化の関係を議論する際の支配的なパラダイムが検討され、より適切な枠組みの提示が試みられている。著者によれば、20世紀以降のキリスト教のグローバルな展開は、その中心をヨーロッパとアメリカから、アフリカ、ラテンアメリカ、アジアに移し始めており、それは南半球諸国の自律的な発展の結果であるとする考え方が力を増している。たとえばPhilip Jenkinsのように、このような考えを提唱する論者の多くは、南半球におけるキリスト教徒人口の増大を強調している。しかし、著者は第1に、改宗と出生率の増加が統計的に区別されていないこと、第2に、歴史的に見てこの現象は現代に特有のものではないこと、第3に、南半球やキリスト教という包括的なカテゴリーを用いることにより、国家間あるいは宗派間の区別が無視されてしまっていることの3つの理由からこの主張に疑問を呈する。さらに、人口学的観点を強調しすぎるあまりアメリカのキリスト教が持つ経済力やアメリカの軍事力などの要因が軽視されていることも、このパラダイムの問題点として指摘している。

結論として、著者はアメリカとヨーロッパが南半球諸国に比べて相対的に経済的、軍事的優位を獲得している点や、米国教会の海外活動が依然として続いている点を考慮すると、上述のパラダイムは議論を単純化しすぎているとする。キリスト教のグローバルな展開は特定の地域を中心に行っているというよりは各国の有機的連関によって成立しており、アメリカのキリスト教と南半

球諸国のキリスト教は相互に影響を及ぼしあっていると考えるべきであるとする。

第3章では、まず、第2章で検討されたパラダイムの単純化に歯止めをかけるためには、グローバル化自体が持つ多面的な性格に注目する必要があると述べられる。そして著者は、グローバル化の4つの側面を考察することで、アメリカのキリスト教は、現在も影響力を持つ余地があることを示そうと試みている。

第1に、グローバル化には世界的規模で規範や実践を規格化するという側面がある。著者によれば、世界の人々が共通の言語としての英語を受容しつつあり、西欧諸国を中心とした市場が隆盛していることによって、国際的な交流はかつてないほど容易になっている。結果として、キリスト教はひとつの世界的な共同体として意識されるようになり、個別のキリスト教徒は相互に責任を負っていると自覚されだしている。このような状況は、アメリカのキリスト教の他国への進出を推進する要因となっている。

第2に、ローカルな多様性を維持、ないしは増加させるという側面も見出される。著者は、発展途上国におけるキリスト教には地域によって多様な実践と教義が見られるとする。しかし、その多様性は外部からの影響とは無関係な独自の発展にのみ起因するわけではなく、より強大な力を持った構造的な背景にも影響されている。アメリカのキリスト教はそのような背景のひとつとして、たとえば牧師の派遣や教育などによって他国のキリスト教の形成において重要な役割を担っていると論じられる。

第3に、グローバル化には人々を有益な市場に参加させ、貧困を減少させるという側面がある。現在、発展途上国の一部の人々は、グローバル化によってもたらされた経済的發展によって新しい機会を獲得しはじめている。アメリカのキリスト教は、このような機会に対して、宗教的指導者の派遣、宗教的なサービスの提供といったかたちで対応し、その影響力を行使している。

第4の側面はグローバル化が一部の人々を世界的な市場から疎外させることによって貧困を増加させているというものである。このような状況にある人々は、西欧に対して理想的なイメージを描いている場合が多い。そのイメージが反映されてアメリカのキリスト教は富をもたらす集団として捉えられる。その結果、米国教会の海外活動は好意的に受容され、容易に浸透することが可能になっていると論じられる。

第4章では、現在のアメリカのキリスト教が持つグローバルな広がりを理解するために、現代社会のグローバルな諸現象からはやや離れ、アメリカのキリスト教と他国の間における国際的な紐帯の歴史的経緯が扱われている。著者によれば、一般に国際的な活動は主として2つの主要な障害を抱えている。すなわち、コストを増大させ協同することを困難にする距離の障害と、関係の構築の阻害要因となりうる文化と言語の障害だ。この2つの障害を乗り越えるためには、技術的解決だけではなく社会組織の形成も必要とする。キリスト教はそのグローバルな活動のために、人材と資金の流れをコントロールし、他国に関する情報を提供することで2つの障害を乗り越えようとする様々な社会組織を生み出してきた。以下、本書で紹介されている社会組織の実例について見ていこう。

最初期の社会組織は、American Board of Commissioners for Foreign Missionsなどのような、今日でも依然として大きな影響力を持つ19世紀初頭に誕生した教派的連盟である。この組織は所属する教会から資金と人員を集め、海外の牧師を支援するメカニズムとして働いている。この組織

の特徴は、それぞれの教派の国際的事業を独占する権利を有している点にある。

しかし、19世紀後半になると、活動をより広範囲に展開するために新たな組織が模索されはじめる。そして、国際的ネットワークを開いた外交条約と貿易協定、教派を超えた個人的募金の増加、通信と移動を容易にした技術的進歩、種々の非教派的キリスト教団体の創立などの影響から、Gospel Mission of South Americaなどのような、教派を超えた独立機関が登場するこの種の組織は、異なる教派や、教派に属さない教会からも人材と基金を募ることができた。

さらに、第2次世界大戦時代から登場するCatholic Relief Servicesなどのような、宗教的な背景を持ったNGOは、第3のタイプの組織として影響力を増しつつある。この組織は政府からの援助を資金源としており、国家との結びつきが相対的に強い。また、他のタイプの組織が布教を念頭に置いた活動を重視していたのに対し、この組織は改宗を最終的な目標とせず人道的支援などにも力を注いでいる。結果として、他の組織に比べより多様な活動を展開している。

最後に、近年増加している組織のタイプとして、Christian Broadcasting Networkなどのような、ビジネスモデルに基づいた利益主義的な牧師集団がある。この組織は、これまで相対的には重視されてこなかった経済的利益を強調している。この組織は衛星放送を効果的に用いたテレビ伝道師の活動などによって、世界中の家庭と教会にキリスト教を広めている。

第5章で、著者は、アメリカのキリスト教徒と教会が従事する海外活動の動向を表すデータの検討からそれらの持つグローバルな影響力の様相を考察し、アメリカのキリスト教は世界の中で役割を失っていないことを示そうと試みている。現在、多くの教会は、たとえば、他国の教会との提携、海外派遣の援助、人道的支援、難民救助といった多様なかたちでグローバルな活動に従事している。なかでも重要なのは人々の短期の海外派遣であり、その実施数や実施する教会の数が増加しているというデータが示されている。それと同時に、国内では、教会の国際的な活動を支援する形でグローバルな活動に関与している者も多いと指摘されている。

著者は、種々の海外活動の分析から、アメリカ国外におけるキリスト教の興隆は自律的なものでありアメリカのキリスト教の活動とは無関係である、とはみなしえないと論じる。実際には、アメリカの教会の多くが依然としてグローバルな活動に従事し続けており、他国のキリスト教に影響を及ぼしている。さらに、その活動は、輸送、通信技術の発達によって過去の海外活動に比べより柔軟に展開されていると論じている。

第6章では、合衆国の対外政策とアメリカの教会の関係が論じられる。ジャーナリストのEsther Kaplanや歴史家のScott Applebyなどの論者は、近年のキリスト教団体が政府の対外政策に対して以前にも増して影響力を及ぼすようになり始めていると主張している。しかし、著者によれば、この主張の根拠は部分的に疑わしいとされる。

著者は、アメリカの宗教的組織は政府に影響を及ぼす可能性を持っているものの、組織の指導者はその影響力を否定する傾向にあることを指摘し、彼らの一部は、むしろ影響力が制限されるべきだと考えていることに注目する。彼らは、宗教的価値が政府の政策をめぐる議論で考慮されることを望んでいるが、政策を宗教のみに基づくべきものとは考えていない。そのため、彼らは政策に影響を及ぼそうと試みる際、立法や政策決定に対して直接的な影響力を行使するよりは、意見を表明し、会議に参加することで自分たちの意見が聞かれることの方を重視している。彼らは次の4つの活動によって上記の目的を達成しようとして試みているとされる。第1に、政策決定者

の考えと態度を左右する資源を動員すること。第2に、政府の計画を効率的に実現できるように働きかけること。第3に、組織の構成員を教育し政治への関心を高めること。第4に、既に可決した法案に対して支持を表明することで正当性を与えようとする、こと、である。

第7章では、本書全体をまとめた上で、今後のアメリカの宗教を研究するために重要となる観点について言及される。はじめに、先行研究批判のまとめとして、アメリカのキリスト教に関する広く知られた3つの説に疑問が投げかけられる。第1の説は、アメリカのキリスト教は広い世界から撤退しつつあり、キリスト教のグローバルな活動に関与しなくなりつつあるという説。第2の説は、地域的な教会はメンバーに対する支援に主たる関心を示しており、コミュニティに属さない者や、国外の信者への支援には興味を持っていないという説。第3の説は、アメリカのキリスト教は、合衆国の対外政策において自由貿易や一方的軍事行動を含む帝国主義的試みを奨励する、福音主義的な勢力であるという説。以上の説はいずれも実証的な根拠を欠いており、既存の研究を修正する必要があると論じられる。

つぎに、著者は、アメリカのキリスト教によるグローバルな活動が増加していることの社会的要因を総括して次の4点を挙げる。第1に、輸送と通信技術、経済的統合、移民などによって合衆国と他国間の距離が縮小しつつあること。第2に、英語、テレビ、ポップ・ミュージックの拡散によって世界的に文化が平板化しつつあること。第3に、信仰に基づいた国際的人道支援、救援活動の組織的影響力が増大しつつあること。第4に、教会自身が地道にグローバルな活動に精を出しつつあること、である。

最後に、著者は、アメリカのキリスト教がグローバル化することによって引き起こされている5つの緊張関係を挙げ、合衆国の宗教状況を研究する上での今後の困難な課題に取り組むための足がかりを提供しようと試みている。第1の緊張関係は、アメリカのキリスト教による海外活動の性質をめぐるもので、教会はローカルな活動とグローバルな活動をいかにして両立するべきか、あるいは、どちらにより力を注ぐべきかについて意識しなければならなくなっている。第2に、活動の目的をめぐるのは、貧しい人々に対する奉仕活動と、彼らに対する布教活動のどちらを強調すべきかが問題になる。第3に、アメリカの教会と他国の教会のあいだに形成される関係性については、他国の人々のために活動を行う外部集団として振舞うべきか、他国の人々とともに活動を行うパートナーとして振舞うべきかが問題になる。第4に、かつての宣教活動に対する解釈については、それを英雄的な偉業とみるか帝国主義的な愚行とみるか、また現在の海外活動と過去の宣教活動がどの程度連続しているとみるかが問題になる。最後に、国家との関わりについては、テロリズムや兵器の拡散などによって脅威にさらされている国家の良心を吟味する際、グローバルな活動を行う教会の理念が有益であるか否かが問題になる。以上の論点は、相対的に軽視されてきたアメリカのキリスト教のグローバルな側面に注目することで得られるもので、今後の研究にはグローバル化を視野に入れた観点が重要になると述べられる。

以上が本書の概要である。以下、本書の意義と問題点に関して評者の見解を述べたい。本書の意義としては、まず、アメリカキリスト教研究において相対的に軽視されがちであったそのグローバルな側面を、豊富なデータと丁寧な議論によって明らかにした点にある。これは、アメリカキリスト教研究のみならず、宗教研究一般に対しても意味を持っている。近年の宗教研究におけ

るグローバル化の概念は、主として宗教回帰や宗教的信念の再編など大きな文脈の中で注目される場合が多いが、著者の研究は、グローバル化した社会の中で個々の宗教、あるいはそれを信仰する個人がどのような立ち振る舞いを行うかに注目しており、宗教とグローバル化の研究の新天地を開いたといえよう。

また、著者が提示する5つの緊張関係も、アメリカのキリスト教のみならず、国際的に活動する宗教団体一般に適用可能な論点として今後の研究に資すると思われる。キリスト教以外の宗教団体もグローバル化した社会に対してなんらかの反応を見せており、それらについて研究する際にも本書の議論は参照に値する価値を持っているといえるだろう。

しかし、本書は同時にいくつかの課題も残していると思われる。第1の課題は、アメリカのキリスト教という枠組みに関わっている。本書の考察対象であるアメリカのキリスト教は一枚岩ではなく、その内部に相当な多様性をもっている。本書では個々の事例やデータの分析においてキリスト教内部の差異について少しは言及されているが、アメリカのキリスト教のグローバルな展開に対して内部の多様性がどのように影響しているかについてはほとんど触れられていない。そのため、著者の議論は、過剰な一般化を行っている部分がある。これまでなされてきたような、ローカルな側面に注目した研究と本書のような議論を組み合わせることによって、アメリカのキリスト教のより詳細な姿を描くことができるだろう。

第2に、本書ではアメリカのキリスト教とグローバル化に関する多くのトピックが各章で網羅的に扱われているものの、個々のトピックを総合する議論が乏しいように思えた。たとえば第4章で扱われている社会組織の歴史的経緯は、本書の主題である現代のグローバル化した社会におけるキリスト教の影響力とどの程度密接に関っているのかがやや不明確である。本書で扱われているトピックを包括的に整理しうる、グローバル化とキリスト教の関係性についてのより一貫した理論を構築することが課題として残されていると思われる。

とはいえ、本書は、アメリカキリスト教研究のみならず、宗教研究一般にとって重要な議論と課題を提起した価値のある1冊といえるだろう。